青いことはそう悪くない。

『永遠平和のために　カント十六歳からの平和論』を読む

菊地知子・鈴木実乃里

小さな青い本である。表紙には、カント先生であろう人物が、多色刷りの銅板画で描かれている。美しい刺繍の施された服やヘアスタイルこそ当時の学者をほうふつさせるが、やや重たそうな上まぶたに、巻き毛と同じ茶色の目をたたえたその表情は、気難しさよりもむしろおどけた感じを醸し出している。

ドイツ文学者である池内紀氏による訳は秀逸で、二百年以上も前の、おそらくはやたらとむずかしいであろう哲学者の言葉が詩的ですらある日本語になっている。百十数ページの本の前半五十ページ弱は、本文から抜粋された短文と写真とのコラボレーションになっていて、後ろ半分が本文の全文と補説、付録、そして訳者解説である。

編者の池孝晃氏のこだわりにより、前半に文章と写真とのコラボレーションというスタイルをとったことで、この小さな本は、絵本かはたまた上質の詩画集の趣を呈している。水面を飾る濃いピンクのスイレンの花。物悲しい目をした白馬の背で、少し不安そうな面持ちの白い衣をまとった少年。三人の熟練した写真家による写真はどれも、鋭くかつ優しくファインダーをのぞくそのまなざしの故だろうか、訳者言うところのアフォリズム（警句）を、さらに

鋭く私たちに突き付ける。言葉も写真も、淡々と語られるそれでありながら、である。

一つの「夢」や「理想」を明るく語れるほど幼くはなく、さりとて大人びた諦めや達観もままならない十八歳が、父親から差し出されてこの本を読んだ。父親は多くを語らない。「やさしい子だからさ。」とだけ、言い訳のように連れ合いの私に言って、生きるのにあまり器用になれない娘に、この本を選んだ。自分を肯定して生きやすくなるための処世的なものも、叱咤勉励のたぐいも、選び得たであろうに。父親が選んだ本を、娘は特に熱心に、というふうではなく、それでもともかく読んだ。読後につづったものが以下である。

正直なところ、この本を開くまで私はカントという哲学者について、本当に何も知りませんでした。彼が説いたという「純粋理性批判」や「実践理性批判」の何たるかは言うに及ばず、カントがどこの国に生まれ、どの時代を生きたのかさえ知らないまま（その上、うかつにも冒頭の「カント先生の紹介」というページを飛ばしたまま）この本を開き、カントに出会いました。

私がこの本を開いて最初に思ったことは、永遠平和という大きな目的のためになされなければならない事柄としてカントが提示している一つ一つの内容は、言われてみれば「あたりまえ」のことばかりだということでした。

「いかなる国も、よその国の体制や政治に、武力でもって干渉してはならない」

「かぎられた土地のなかで、人間はたがいに我慢し合わなくてはならない」

また、冒頭には、

「平和というのは、すべての敵意が終わった状態をさしている。」とあり、永遠平和の何たるかが語ら

れています。平和というのは永遠という語をつけなくても、そもそもが永遠であるはずだということでしょう。

淡々と語られているそれらは、そのまま「あたりまえ」であり、きっと誰もが知っていると思っていることばかりに感じられました。

それらの「あたりまえ」を一つ一つ確認していくことで実現される永遠平和が、現実主義者にとっては空虚な理念になるのだとしたら、私にとってはそれこそが不思議です。

目指されて然るべき人間の社会の状態を「永遠平和」とひねりなく見据えて、カントの言葉は語られます。明快で迷いのない言葉は、心地よく軽妙な日本語訳のなせる業なのでしょうか、まるで現代のために書かれたかのような新鮮さが感じられるものでした。少なくとも私が訳者による解説を読んで『永遠平和のために』が二百年以上も前に著されたものだと知ったときに、深く驚嘆したことは隠し得ません。

「国の軍隊を、共通の敵でもない別の国を攻撃するため他の国に貸すなどということはあってはならない」

というカントの言葉を、どこぞの国に贈りたいと思うのは私だけではないと思います。

ともかく、カントの語った平和論は、二世紀という時間の隔たりを超えて私たちに永遠平和への道標を示してくれているに違いないと思うのです。

私は、多くの若者がこの本と出合い、そして自分たちに関係なく複雑に構成されているように思わされている本当のことに改めて気づくきっかけになることを願ってやみません。そしてまた、多くの大人がカントの言葉に耳を傾け、もう一度平和と向かい合ってくれればいいと思います。

そうして、きっと誰もが多かれ少なかれ気づいて

いる平和の大切さを、また平和のために知っているべきことを、これからの地球に生きる人たちみんなに伝えていくことができれば、永遠平和は実現されるのだと、誰もが思えることを願わずにはいられません。

人は、長い長い間戦いを繰り返し、ゆっくりゆっくり何かに気づき、老哲学者が書き残した平和論の小さな本のほこりを払ってそれを開きました。そして、それでもまだまだ戦いを繰り返しながらも、永遠平和を目指して国際連合を組織しました。それはそれは遅々とした歩みなのだと思います。しかしまた、確かな歩みでもあるのでしょう。何も諦めることはない、絶望する必要はないのだと、私はひそかに、でもしっかりと感じています。

カントは、生まれ故郷東プロシアの首都ケーニヒスベルクから、生涯ほとんど出なかったのだという。一八〇四年に八十歳目前で没したカントは、一七九五年、七十一歳の時にこの本を書いた。「バルト海の真珠」とうたわれ、複数の民族、人種が共存しながら民族紛争を起こさなかった町から、世界を見た。やむにやまれぬ思いで、また、啓蒙家たる哲学者の果たすべきこととして、カントが「永遠平和」を語ってくれて本当によかった、と私は思う。理想を語ることこそ時に現実を変えるかもしれないのだと、大人だって青臭くていいのだと思えるような、そんな〝心のスキ〟をもつことが、誰に対しても許されている思いがする。娘にも、そして私にも。

（お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師）

永遠平和のために
カント十六歳からの平和論
イマヌエル・カント著
池内　紀訳　綜合社